

躍動カフェ（阪神北地域） 議事要旨

1 概要

- (1) 日時：令和6年7月3日（水）14：00～16：30
- (2) 場所：伊丹商工プラザ 6階 マルチメディアホール
（伊丹市宮ノ前2丁目2-2）
- (3) 参加者：齋藤知事、阪神北地域（伊丹市、宝塚市、川西市、三田市、猪名川町）に在住・在学・在勤等しており、にぎわいづくり、交流拠点の運営、里山保全活動など各分野で活躍している30名
- (4) テーマ：誰もが自分らしく暮らし、ひと×まち里山 みんながつながる阪神北
- (5) 内容：知事挨拶
グループ別意見交換（A～Eグループ）
グループ別意見発表（A～Eグループ）
知事総括コメント

2 意見発表の内容

A にぎわいのある地域づくり

発表者：九鬼麻衣（進行役）

現状と課題：

- 「にぎわい」という言葉自体が、商業的なにぎわいを指すのかコミュニティの活性化を指すのかなど、意味が広い。それをきちんと定義し、地域ごとにビジョンを作る必要があるが、行政が作っている色々なビジョンは、実際に地域で活動している者からすると、地域の実情を踏まえたうえで地域の魅力として伸ばしていくべきもの、との認識が少し離れている。
そもそも、その地域の間人が、この地域はどこを目指してどうなっていくべきなのかという議論をする機会が足りていない。そういったビジョンがないがゆえに、それぞれが個別に動いていることも課題として挙げられる。
- 地域を活性化していくための手段として、空き店舗の活用などが挙げられるが、地域活性化に向けた活動を行う前に、すでに地主さんが売ってしまい、そこを拠点とした活動ができなくなってしまった、といった事例もある。

課題解決に向けて：

- ビジョンを作る際、官民連携し、同じテーブルで考えられたら良い。例えば、行政が予算を組むにあたって、どんな流れでやっているのか分からなかったり、民間の側が本当に欲しいものと少し外れた補助事業があったりする。
そういったところをみんなで話し合ってみていく、コーディネートする人材が欲

しい。そして、コーディネートやサポートする仕事を生業として認めてもらえるような仕組みが必要。

- 地域の人々がビジョンに沿った活動ができるよう、きちんと地域全体で合意されていることが大事。

その課題解決に向けたアイデアとして、例えば、不動産の場合、地域のコーディネーターと不動産業者につながりがあること、もしくは不動産業者がビジョンを共有したうえでその役割を担ってもらえるといい。

不動産業者にはビジョンを理解してもらい、活動の拠点にふさわしい不動産の掘り起こしをお願いする。

- 反対に、活動のために地域の中で不動産を使いたい人と不動産業者へつなげる役割をする人も必要だが、できる限り、行政含め既に地域の中で動いている方にやってもらうことができれば、地域活性化につながりやすいと考える。

B 多様な人々が暮らしやすいまちづくり

発表者：時任啓佑（進行役）

現状と課題：

- 多様なつながりがある状態を作っていないといけない。例えば、社会的マイノリティ（少数者）の方が、身近の人などのコミュニティに多様性として受け入れられず、自分の世界に閉じこもってしまうと、様々な問題が発生しかねない。
- 多様な人々のつながりという観点で、もっと企業などの団体と学生などの若者がつながれる場所があってもいい。
- 企業側としても若者と何か連携したい、学校側も企業などと何かしたいという話はあるが、現状、なかなか両者がつながっていく機会は少ない。兵庫県は若者の県外流出率が高いが、教育の一環として企業とのつながりがないことも一因としてあると思う。
- 多様な人々が暮らしやすい状況を作るためには、背景の違う様々な方たちと知り合って、相互に理解する、そういう機会をたくさん提供できると良い。

課題解決に向けて：

- 社会的マイノリティ（少数者）の方が身近にいる、そういった状況が当たり前であると社会的に認識されているのは大事なことで、そういうことを子どもの早い段階から受け入れていくことができるとより良い。

色々な人たちが集まり、つながれる場所をもっと作っていく必要がある。

- 色々な人々がつながるためには、やはり多様な人たちがたわいもないようなことを気軽に相談ができたり、つながれたりする場の提供が重要。

具体事例として、フレミラ宝塚（老人福祉センターと大型児童センターの複合施設）のような、子どもからお年寄りの方も気軽に訪れられる場所が良い。大学や行政などの

中にある専門の窓口はしっかりしているが、訪問にあたって明確な課題が自分自身でも分かっていない、だけど困っている、といった人は多くいるので、フレミラ宝塚のような受け皿になる場が必要である。

- 単に場があるだけでは機能しないので、Aグループも課題として挙げていたが、色々な方と関わったり、つなげたり引き出してあげられるコーディネーターのような存在が必要。そのコーディネーター同士のつながりも重要。
- 人々がつながれる場があって、コーディネーターがいて、いろいろな人が交わっていくと、そこから何か新たなコンテンツを生まれ、地域に還元していくような動きにもつながっていくかもしれない。

具体的に、グリーンジャム（伊丹で行われる音楽フェス）は、学生のボランティアがスタッフとして運営に携わるなど、若者とのつながりもできていますし、イベント自体を継続していることで、音楽に興味を持つ人が増えているといったアウトプットができている。これは音楽の事例だが、そういう場があって、まぜる人がいて、そのように多くの人に関われるコンテンツを色々なジャンルで作って増やしていくことで、そのまちの中で活躍する人が増え、つながれる人も増える。

C 北摂里山の魅力再発見

発表者：龍見奈津子（進行役）

現状と課題：

- 阪神北の魅力の1つとして、里山が近くにある、都市と里山が近いというのがあるが、特に里山がある場所では少子高齢化が進んでおり、担い手がいなくて困っている。里山をどう維持していくか。
- 一般の方の中で里山に興味があったとしてもお金にならないので携わることを断念する、利益がないので活動も続かない、一方で、行政頼みもどうなのかという状況で、どう里山をビジネス化していくかが1つ目の課題。
- 里山といっても、なかなか切り口がしっかりしておらず、少しぼやけている。里山の認知向上が2つ目の課題として挙げられる。
- 3つ目の課題として、里山に関する情報発信が不足している。市内に里山があるが、市内の方でも里山のことを知っている人が少ない、仮に興味があっても、どう関わっているのか分からないといった意見があり、里山に関する情報があまり出ていない。

課題解決に向けて：

- どうしたら里山をビジネス化していけるかについて、一般の方は、日々の仕事や生活などで疲れているという側面もあるので、特別なことをするのではなく、普段していることを切り口として魅力化し、知ってもらうことでビジネスにできると良い。
- 里山をより良く知ってもらうために、水を切り口にするのが良いのかもしれない。実際、

水は人々の生活に深く関わっていて、水を綺麗にするということは、山を綺麗にすることにつながる、そのことを理解してもらったうえで実際に里山へ投資をしてもらう、といったかたちでビジネスにできたらいい。

- 里山の情報発信について、1つの意見として出たのが、小さい頃から教育の一環として里山というものがどれだけ大事であるか、人々の生活に対し意味があるものなのか、どう守っていくのが良いのかなどを教えていくことが大事。実際に小学校の時に里山の学習をした経験があり、大人になった今も里山に関わる方がいる。

里山に関連したイベントを開催するのも、認知の向上を図るうえで有効な広報ツールの1つ。

- 最後に、里山保全の担い手の確保、やはりここは一番重要なところ。

ボランティア頼みではすごく難しいというのが私たちの印象であり、とはいえなかなかビジネスとして確立していくには時間がかかるので、その間の部分は税金を投入して有償ボランティアという形の制度づくりもしてもらいたい。そうすることで、企業の方にSDGsの活動の一環として、里山に関わっていただくことで、並行して担い手を募集していけるのではないかと考える。

認知の向上をしていってビジネス化として事業をすることで、そのお金を保全の方に回す、そういうサイクルができると、これからも私たちの里山を守っていくことができる。

D 美味しい「食」と多彩な「農」の魅力向上

発表者：石井伸啓（進行役）

現状と課題：

- ここ阪神北を含めた阪神地域は大消費地なので、食、農産物の供給が足りていない状況だが、かといって作れば売れる、ブランド力高める取組などに重点を置かなくてもいい、というのは農家としてどうかと疑問に思っている。

競争力自体があまりなく、出荷すれば売れてしまうという状況も問題かもしれない。

- 売れ残った農作物は子ども食堂に供給されることがあるが、なかなか質の良いものが集まらず、結局、無償で仕入れたり、足りていなかったりといった現状がある。

学校給食に関しても、農作物が足りておらず、食材として提供することが難しい。

- 地場産品を消費してもらいたいが、どうしても地場産品でないものの方が安い価格で入ってしまっているため仕入れてもらえないことがある。学校給食は市単位なので、市外、例えば、宝塚から他の阪神北地域に給食を持っていくという作業が難しいこともある。

課題解決に向けて：

- ブランド力を高める取組として、丹波篠山をはじめ、三田や阪神地区で黒豆や黒枝豆を推して売っているが、1つのものを強く作ることは重要。加えて、この地域は大消費地

で供給が足りていないので、もっと農家を増やさないといけない。

- 農家が足りていれば、農家から子ども食堂や学校といった施設に野菜を届けることもできる。地産地消という意味で、地元の野菜が自分たち身近なところに届くというのは、子どもたちにとっても、すごく勉強になる。
- 県には、地場産品の需要と、供給のマッチングができるような仕組みを作っていただきたい。また、地産地消には、大きな意味があり価値があるものなので、学校給食について、親御さんからの給食費だけでなく、そこに対しての補助をするなどして、地産地消の価値を上げてもらいたい。
- 就農者減少への対策として、農地から都市部の人たちにも情報を届けられるよう、SNS等を活用して、もっと農家・農業を知ってもらいたい。例えば、インフルエンサーや学生の方たちに紹介してもらえそうな仕組みを作るなどし、農家になりたいという人を増やしていかなければならない。

E 万博に向けた阪神北地域の魅力発信

発表者：諸富稜（進行役）

現状と課題：

- 効果的な魅力発信のために、目的を明確にしないと、どんな魅力を発信していくのか、その発信の方法も見えてこない。
- 魅力発信の目的を考えるとともに、魅力発信によってどんな効果を得たいのかもあわせて考える必要がある。
- 企業を誘致することも、魅力発信の1つ。例えば、パソナグループが本社機能を淡路に移転し、かなりのインパクトがあったように、魅力的な企業を誘致することも魅力発信として重要。
- 移住定住について、伊丹市は、住める場所が相手おらず、人口も減っていない。宝塚市も共通した部分があるが、ハード面の充実だけでなく、地域のブランド価値を向上させて、住みたいと思えるような状況を作る必要がある。ブランド価値を向上させることで、その地域内での消費活動が増えたり、消費金額が増えたりすることもある。
- 猪名川町については先の2市と異なり、田舎暮らしを押しつつ、大阪にも近く、かつ魅力的な物件があることを発信していく。
- 三田市は、ニュータウン開発を機に人口が増え、その後子どもたちが一気に就職して出ていくことで人口が減っているという状況。そういった人たちに、いかに戻ってきてもらうかが課題。

課題解決に向けて：

- 効果的な魅力発信に向けて、自身の会社を例に挙げると、新しい社員を採用や対外的に仕事のオファーをするといった目的のために適切な魅力発信をする。

それが、社員を増やしたい時と仕事のオファーを増やしたい時とでは、発信する魅力の内容は変わってくる。

- 魅力発信によって得られる効果について、自治体などが地域の魅力を発信する際は、移住定住につなげたり、観光客を増やすこともあわせて考えるべき。
- 企業誘致について、地域にオフィスを構える企業が増えれば、それだけまちに働きに来る人やまちに住む人が増え、地域の魅力にもつながる。
- 移住定住について、昨今、子育て世代の共働きの夫婦が増えている中で、両親の近くで子育てができる環境も良いものなので、そういった側面でも子どもたちが戻ってきてもらうような取組サイクルができれば、現状を打開できると思う。

3 知事総括コメント

- それぞれのグループで熱心にご議論いただいた結果を聞かせていただいてよかった。
- A グループについて、コーディネーターの中で、切り口を明確にしていくという考え方は面白い。

阪神間では、子育て世帯が求めている室内の遊び場をコーディネートする人、例えば、雨の日を考えた時に、室内で遊ばせる場所があればいいのに、というニーズが強いので、空き家を活用してやっていくコーディネートがあればいい。関連して、高校生たちがショッピングモールのフードコート等ですずっと勉強している姿を目にすることがあるので、高校生のための自習室を増やしていきたいと思っている。

今回加古川と豊岡とたつので、県の施設等を活用して自習室を増やしていくように取り組んでいくが、自習室コーディネートで空いている空きテナント等は無償で貸してくれるとか、そのように切り口を明確にしてコーディネートする機能ができると思う。

- C グループについて、万博開催により、3,400万人ほどのインバウンドが見込まれていて、特にスタディツアーといったもののニーズが強くなってくると思うので、これを機に、兵庫県に来てもらえるよう取り組んでいくことが大事。

それが、兵庫フィールドパビリオンという取り組みで、兵庫県内には地場産業や、お米づくり、里山の体験とかいろんなものがあって、万博に来た人にそのまま寄ってもらおうと。そこで現場でのものづくりのすばらしさや歴史や伝統文化を知ってもらい、体験してもらうことで、その持続可能性に挑戦する姿を体験してもらうことがコンセプト。

実は、フィールドパビリオンのプログラムの1つに、西谷地区のまちづくり協議会という地元の方々が中心となって進めている、「西谷地区の未来の里山体験ツアー」がある。それ以外にも阪神北地域にはいろんなプログラムもあるが、窓口として、まずは県に相談いただきたい。

- 外国人の方が泊まる場所をせっかくだからと日本を連想させる里山に泊まりたい、といったニーズが多い一方で、そういう泊まれる場所は少ない。ただ、宝塚、阪神間以外の

地域で、例えば、丹波であれば丹波焼の里で陶芸をしながら泊まれる宿も出来始めている。

- D グループの農業について、特に地産地消、そして有機農業を含めてオーガニックへの関心が非常に高い時代になっていますので、学校給食を中心にどうやってつないでいけるかっていうのがすごく大事で、市や町の境を越えての提供、例えば、有機農作物や環境創造型農作物を学校給食に提供し合えるような仕組みづくりは大事だと思っている。

市や町の教育委員会だと、どうしても地元の食材となってしまうが、実は、東播磨地域や神戸地域では、市町を越えて農作元をぜひ提供したいというような色んな声が出始めているので、市や町の境を越えた地産地消のあり方はすごく大事なテーマだと私も思っていますので、これからしっかり議論していきたい。

- SNSを通じた取り組みも本当に大切。関連として、有機農業の取組の中で、消費者と生産者をどうつないでマッチングさせる仕組みづくり、流通の仕組みを、通常のマーケットベースでやっていくのはなかなかハードルが高いので、マッチングをするアプリみたいなものを作ることができないかと考えている。

具体的には、県内の有機農業の生産者の方にシステムに登録してもらい、そのシステムで有機農作物を食べたいという消費者へ直接繋ぐようなマッチングのあり方を、アプリのようなもので県がプラットフォームを提供し、つないでいくような仕組みを作ってみたいと思っている。

- E グループで発表のあった移住定住について、都市部は住める場所の不足が課題としてあるが、空き家をうまくリノベーションし、中古物件として流通するようにすることをできれば、住む場所が自然な形で増えてくると思っている。

例えば、猪名川町柏原地区では、空き家をリノベーションしやすいように対策していて、県も規制緩和をして宿泊施設を増やしてくよう取り組んでいる。三田も県が開発したニュータウンや人と自然の博物館という素晴らしい文教施設がある。こういったところをうまく組み合わせ、どういうふうに魅力ある場所にしていくかが大事なポイント。

- 全体通じてすごく面白いと思ったのが、阪神北地域は兵庫県の中では都会の位置付けだが、里山や食の問題、あとは居場所をどうやって作るのかという、都会だからこそ逆でないものについてのニーズや、自然や食の安全性と食の豊かさ、そして都市だからこそ、人のつながりをどうやってつなげていくかというニーズが非常に高いと分かった。一方で、里山の話テーマにすれば時間に収まらないと思えるほど意見が活発だった。

商業施設があってほしいといったことや、子供が住めるような場所がほしいという真逆のニーズもあるなど、地域の中で無いものを求めている、これは、兵庫県全体にもあてはまること。それらをつないでいければ、地域間でいろんな経済が循環していくような、人の流れが循環していくような経済圏、交流圏が作れば、兵庫県の本当に強みなると思う。

- ぜひ今度は現場やフィールドで、西谷や里山で、みんなで集まって農業の話とか里山の保全について話し合う機会があれば面白いと感じた。

- 本日はありがとうございました。